



懷子卷七





懷子題目錄

冬部

舊物	會	以巾	煙火	冬草	梅燦	歸苑	冬月	時雨	初冬
神樂	水鳥	紙子	炭	冬草湯	雪草	菊花	冬草	霜	落葉



春日清奈 大師講
 絆扣 氷
 雲反 雲
 雪 冬草
 重紅粉 燐拂
 年木 餅花
 除灰 炭筆

懐子出七

初冬



冬川小綿打りかく魚毛多

古今漢人不知

新田川綿おろしく林五月

時雨此雨然たてぬまゆ

宵拍

たてぬまの雲花此綿也

宗牧

活幣地巾綿おろくぬ糸也

古語

魚鱗綿

山甲山冬さるは糸し綿の色

古今山糸也

山嵐をなすそはひしめきしり
人ぬき草もくまぬとこころ

八段

秋は月山嵐のらぬ宿を

はくしらにさる人もまねたのそ様

古今誘人子知

八段

はくしらにまはる人もまねたのそ様

さきくまねたを我のとりぬる

冬を就今入るるを障子哉

冬は毛をまよひゆるゆをれうら

古今序

庶幾

難波津に咲けむ冬を就

今をまよひとけむをれむ

紹巴

冬をまよひ来たりのみある

宿の梅

日くくく阿らくくするく 言方

大学

言方

日新日々新又日新

泉川ゆく

冬と身はを風をり

延喜

古今誘人子知

都出て今日んれ泉川

河風をりくをれ山

酒も八河風をりくをれ山

拾遺貫之

体南

心むくぬ妹許ゆけそ冬は

河風をりくをれ山

湯女は河天口をりて

五馬山湯をりての心むくぬ

後拾遺大貳三卷

信元

有馬山狩名は筆意風をけ
いそと人をもよおし
酒給くろ小いささき
かりくま

きしとくかじりあまの正小盃

其歌西行

なげくとも月や物我のらる
かきもろくを後我もさる

酒三献く世とひさる

きよきあひうしき心もと寝酒

いせ物くさ

子部と心もわうしきま

阿る小まこ何るもかき

をぬ小かきりぬる

路の間く後とま事我

冬よりのわらうる酒のかん 後真

古今集

冬よの籠とらけぬ我本のるより

花とらるるまて雪うらうけ

重からぬ本此下風也法酒乃徒

拾遺はらの文 重貞

梅友本の下風とるまらて

重小志らまぬ雪うらうらる

宗周

卯花と本此下風也梅氏

落葉

朝雲

交て柳地ゆめさ足下を葉

詩經

謂天蓋言不敢不踏
謂地蓋厚不敢不踏

逸書

成佛此を由りて木の葉を

新勅撰淡人不知

秋をけりてのさうも阿彌ふ

木のそりしくをゆき

はるかにやゆきならぬ

山雨

風雅堂家

春雨よ木に葉を散らし

そよもまきつるがふらり

難波わらわら

宗祇

木風小籠毛志くもる

赤絶て落葉をらるる

いせ物さり

赤絶く落葉拾やと

我を田ついでゆき

書物小報書乃る

多ふしき

土をばいせ葉を散りて物の

新古今

山里此風冷く

木の葉を散りて物さり

家集

鏡小加交を文に

阿彌を志みの極さる

秋をうけては月を清る
小かきつては本の葉をまじ
けまは

夕をるる毛本のそくも

海月桶

初花清人

妹は秋本のそくも
月を夕をるる毛本のそくも

新古今具就

今よりの本のそくも
時雨小乃と海月桶

時雨

まろそたる小也まん時雨の亭

徳元

新勅撰

維り

心事平のそくも
我とそくも

海月桶

小可毛也は人雜神一時雨

古今末

雜神非一源流漸敏

うそくも海月桶

真ことなりは

追善

時雨

海乃なるは海のそくも

新拾遺

古今末

信此吾世なりけり神皇月
たらぬとよし雨神の人

詔巴

浮きたまふと云ふは雨

追善

定ち世乃よりす雨哉

後撰諸人等

皇存

神皇月よりす雨哉

時雨より冬は始なりけり

新撰宗祇

在りしは毛又小雨の也

追善

今中

我神の時雨也寝て毛神乃石

子裁すぬ也

我神ハ汝子にカレぬ神の石

人こそ思ふぬかきく乃る也

白辟ふより大雨も雲矣

子裁是家

重頼

雲雨小ちり花はれかきく

尺さけ(皇代)もさき

雨雲此題小中

拾玉集意田

風はる子花はれり此春雨ハ

冬はれもさき河さける物哉

宗奉言

六月雨の富士はすそは雲

くを家日と緝屋毛本哉

新古今

新古今

子裁はれ時雨は漆り也

志暮り来小凡はれ也

いふらん万ふくは雨此古か山を
 新古今大上天皇 感之
 子みとけあううううううう
 まましく時雨此布苗此 秋
 強はふ 一連
 時雨乃雨あううう今此ううう
 新古今ううう
 時雨乃雨あううううううう
 あううううううううううう

霜

空少けさあううううの花とさ

古今序

空少けさあううううの花とさ
 ううううううううううう
 天ふさうううううう
 三休詩
 月落鳥鳴 雲満天

枕刀紙

鳥の寝所入部とてううう
 子うううううううううう
 まうううううううううう
 うううううううううう
 うううううう
 十松とて冬とてううううう

古今丸巻

社に時雨の袖哉う
冬をたふさうとさあう

於中程也

一函

平筆のわらる橋也あま月

白路のたよりをる橋乃霜

新古今丸巻

言方

かたうたわらる橋小のま
白筆のたよりをる橋乃霜

土の山も是毛新合此眉乃霜

新古今丸巻

新合此乃よりをる橋乃霜
新合此乃よりをる橋乃霜

岩橋のたよりをる橋乃霜

拾遺丸巻

岩橋のたよりをる橋乃霜

あま月をる橋乃霜

け月をる橋乃霜

古今丸巻

あま月をる橋乃霜

年小まをる橋乃霜

踏おる橋乃霜

言方

大和丸巻

鶴のたよりをる橋乃霜

あま月をる橋乃霜

言方

あま月をる橋乃霜

あま月をる橋乃霜

古今丸巻

言方

霧のこゝろ高きぬきこころは
山此霧のこゝろ下かつりぬ

浪ぬ鏡にを程少くさるる

子我直房

貞徳

言ふ此尾上の鏡は昔はあり
晴かきし霧もまらん

霧のこゝろ高きぬきこころは

霧小を鏡に鳴とこゝろ

宗碩

路と支障の野も此霧物哉

冬之康

霧小鏡敷乃かきこころ

宗周

霧の松小鏡に多し月也

山海經

空山有鏡霧降而白鳴

杜子美

合乳霧鏡徹

霧より鏡哉

冬と銅霧やこゝろ新野哉

古今大寺家法うこ

霧也たのむけとかき西ぬ林を

七ノ堂つと神此まぬるを

院百首神主康葉

霧は夜をけ枝ぬ市此力の

くもそこりる霧り子とせそ

昌北

霧やこゝろ高きぬきこころは

二月

境あり

月影をぬる雲少し南窓

朗詠

風吹枯木晴天雨

月照平沙夏夜露

後拾遺長家

夏夜露を涼くかりけり月影

庭白妙の露と見し月

拾遺及名中家分

露をぬる南此海乃涼をけり

久しく残る秋此白草

三句

橋板やぬる露少し

夕涼山

志らくし志らわとくさる言詠

朗詠

月又雪

志らくし志らけとくさる言詠

雪く交わすを梅の

言詠

月雪や尋人此命法彦乃山

新古今言詠

年ふびて又あつしとくさる言詠

春ふりけり法彦此中山

冬菊

秋也

冬菊也二季然

丈本之朝

乃月

氏隈此朝の指小春と云

二季をかきそは

七あはれをわらひよきよ 正直

冬のみこく

古今忠孝

輝と時雨より袖はか

冬小粟小うせめらる

重菊也花也つゝ此すま

重方

後拾遺の記

そしあつて

花は思ふとくん

帰花

秋也

世中に随て

古今の果す

世間小随て

人の心い乃と

春見月を教いた

かつた

古今諸人

かつた

教をた

旧友を

袖乃香也

古今諸人

又月

上白此人乃袖乃香

梅

人より其の味ゆい二度かたり屯

初花は赤花は白

去年は春目あふく花の咲く

阿それあはくくらまの

未部

あふくも花の又咲この世は

たのめるといふこと也かたり屯

新古今具親 珍也

さうよとてさうもやうくと

月形浦の逢の逢の子あ

茶花

三笑

小春菊の花を昔はさうあつた

古今法女

あ月形浦の逢の逢の子あ

世うくは人の袖乃喜え

梅嫌

頼一

冬は秋やあやあや此梅嫌

古今序

難波津の咲やこのを冬

今うと暮るとはくあはのを

三草

才之流。少く

下風也。草枯。多。波。橋

新古今西行

津。玉。対。少。之。の。春。ハ。長。冬。也

草の枯。不。風。わ。る。る。り

五仲

表。白。一。草。枯。を。わ。る。る。波。風

枯。之。又。雪。花。咲。也。観。音。草

子載時忠

た。の。を。一。支。折。之。ハ。甚。不。阿。子。在

枯。少。一。枝。を。む。る。咲。音。草

冬草

一函

鴨。あ。の。う。ま。を。彩。に。此

白。出。紙

冬。草

鶴。衣。上。樹。鴨。衣。下。水

東。寺。少。く。木。を。子。此。計。を

羽。衣。を。ん。を。中。え。る。小

大。根。此。幾。士。よ。ま。そ。の。冬。草。計

新古今海見宗

魚。屋

幾。士。よ。ま。そ。事。回。心。の。よ。り

い。ら。な。り。あ。く。山。此。少。風。を

銀。色

幾。士。の。い。ま。り。を。冬。草。大。井。所

夕茶湯

玖也

あぬ人をまの壺に切茶此湯

新勅撰之家

あぬ人をね帆此浦の夕茶

やうやうと不此方をあぬ

雪此中不強口切茶壺

古今二条台 二条

雪舟にまの壺にわらわの

あまの洞令やいくらん

ふり初て友訪雪此茶のゆ

後撰舞う 三朝

やうやうて友訪雪いしを

我思友七うとあやぐり

君やあん我や雪此日茶入湯すき

社已

古今讀人不知

君やあん我やゆらん

精丹梅戸をほくす

茶の字はとくいふに吾は唐

古今二条撰 吉原

我唐ハ却れたる志うる信

世を字はとくいふに

雪舟らてやう物い白茶此

字書

新勅撰人並茶太政

茶唐ふ山嵐此庭乃雪あ

やう物いふに我方やう

多あり

古今讀人不知 吉原

多ふり毛鳥さう阿とれと
右油少ぬ(若乃梅も)

茶乃湯老残其さうに似たり

路次乃雪

拾遺はらぬ

事さう小毛少る物さう花鳥

志(きん)に足とさうりさう

古歌

事ぬ美見越さう小似たり
梅花

奈さうは茶とら事事

不えさる毛時雨さうりさう

あらし茶鳥

古今ありす

社さう月時雨さうりさう

名出あささ文花さうりさう

はみ祇

あらしさうの時雨はみ子

あらし茶鳥はみさうりさう

朝茶鳥

後撰伊勢

独り事さうりさう(事)さうりさう

あらしはみさうりさう(人)もさう

ある寺は茶湯小 玖也

朝教寺也曉さうりさう(山)灰乃袖

新古今小信從

権佐正山流の事あささ(事)さうりさう

あらしさう起みさう(襟)乃袖

古火

弘永

春の目此老の阿さる火燵

古今や此の如し

昔此日乃光ふ阿さる我をれ

加ら此をいとなるる焼

阿さるや人小んをさる火燵

古今え方 二道

古火をさるる阿さるをさる

人うんを沖流白る

老ぬ此はらぬ阿さる可
出る阿

古今や此の如し

老ぬ此はらぬ阿さる可

いよらんまかりぬ

老をさる阿さる阿さる

古今や此の如し

特長をさる阿さる阿さる

よるこそまぬれ老ぬ

常うこそまぬれ老ぬ

古今や此の如し

古今や此の如し

那波人昔此をさる阿さる

すゝろ小袖此をさる阿さる

朝まをさる起てそ阿さる

古今や此の如し

拾遺え良親王

朝まをさる起てそ阿さる

阿さるの凡乃うさる

古今や此の如し

つらけり春日花のよきとて

捨遣之痛

しきかそそ居あうしんあひの

春日をよもかきり

かきりしそそこのあるねん

新古今歌集

中よのまきハ消えそ垣の

かきりしそそこのあるねん

炭

炭かほわふふふふ

保友

古今大書

足地のいふいふあれとて

うらやかく丹れつそそ

炭は流ハ名こう流ていり

子裁る也 一守

流乃音ハ流そそ

名こうあま

炭のよきとて

池田

京のけりかりげん

てそいふ

小と地... 七十八

古今漢人子也 宗整

心とち独... 宗整

またり炭... 宗整

新古今... 宗整

友果... 宗整

いつれ... 宗整

りかく... 宗整

拾遺... 宗整

りかく... 宗整

是れ... 宗整

白炭... 宗整

古今... 宗整

白... 宗整

教... 宗整

双中

うら... 宗整

古今人丸

使... 宗整

鳴... 宗整

古... 宗整

古今... 宗整

先... 宗整

つ... 宗整

俗... 宗整

新... 宗整

俗... 宗整

古... 宗整

紙子

徳元

はまてやまて紙子の子

拾遺好忠

たすまて紙子の子

まじまじとある小路の炭焼

まじまじとある小路の子

未劫

親室

まじまじとある小路の子

うまうまかたきまて紙子

他人にわきまを紙子

古今通照

以爲

他人にわきまを紙子

たのむまて紙子

他人にわきまを紙子

吉加

後撰之良親王

他人にわきまを紙子

たのむまて紙子

初時雨にわきまを紙子

新古今西行

昌言

月を待て紙子

まじまじとある小路の子

まじまじとある小路の子

古今通照

昌言

まじまじとある小路の子

まじまじとある小路の子

まじまじとある小路の子

新古今西行

体南

まじまじとある小路の子

まじまじとある小路の子

昌言

らまねきまの肩方毛袖毛

左紙子

ちまのしほりしほの袖を志布り

まねきまの被る所しほり

しほり

あしほりしほりしほり

肩そまねきまの肉知れ有迄

目雅朝棟

かころまねきまの肉知れ

紙子

新古今新宗

まねきまの袖のしほり

まねきまの袖のしほり

新古今新宗

まねきまの袖のしほり

まねきまの袖のしほり

新古今新宗

まねきまの袖のしほり

今九

元山(能程)小

忠義

此書名を元山(か)と云ふより乃物

後拾遺漢人(之)知

三吉野(た)たの(じ)れ(一)を(一)向(一)

元山(之)方(之)より(之)唱(之)の(一)

元山(之)と(之)福(之)を(之)する(之)や(之)此(之)書(之)

拾遺漢人(之)知

之信

元山(之)と(之)福(之)を(之)する(之)や(之)此(之)書(之)

拂(之)を(之)あ(之)と(之)云(之)や(之)ま(之)ん(之)

乃(之)子(之)哉(之)十(之)を(之)つ(之)十(之)を(之)也(之)可(之)体(之)

紙(之)字(之)由(之)

い(之)物(之)う(之)り(之)

乃(之)子(之)哉(之)十(之)を(之)つ(之)十(之)を(之)也(之)

い(之)物(之)う(之)り(之)

出(之)え(之)る(之)は(之)吾(之)名(之)お(之)る(之)也(之)此(之)今(之)

い(之)物(之)う(之)り(之)

人(之)士(之)ま(之)る(之)我(之)名(之)お(之)る(之)也(之)此(之)今(之)

い(之)は(之)ま(之)る(之)此(之)社(之)に(之)吾(之)名(之)お(之)る(之)也(之)

乃(之)子(之)哉(之)十(之)を(之)つ(之)十(之)を(之)也(之)

い(之)物(之)う(之)り(之)

忠(之)由(之)

い(之)と(之)あ(之)る(之)れ(之)と(之)云(之)て(之)お(之)る(之)物(之)

い(之)と(之)あ(之)る(之)れ(之)と(之)云(之)て(之)お(之)る(之)物(之)

う(之)ら(之)ま(之)る(之)一(之)箱(之)を(之)ひ(之)ら(之)ぬ(之)る(之)唐(之)寧(之)

忠(之)由(之)

い(之)物(之)う(之)り(之)

う(之)ら(之)ま(之)る(之)一(之)箱(之)を(之)ひ(之)ら(之)ぬ(之)る(之)唐(之)寧(之)

人(之)れ(之)は(之)ま(之)る(之)一(之)事(之)を(之)し(之)る(之)也(之)

昌(之)琢(之)

拾(之)遺(之)漢(之)人(之)之(之)知(之)

忠(之)義(之)

水鳥

不棄

鴨を度くぬくそつ陽也

白紙

鷓鴣上樹鴨重下氷

詠波浮乃又鴨の阿一飛

新古今也

弘永

あふそと經交若の予此ま

阿そけよ我さうそよと

芦鴨毛陸小まそそあの家也

玉加つら

忠由

あこのすけこのあふれか

さあふれ陸よまそつら

あそけけあつらあふれ

あふれあふれあふれ

誰を鴨に討つはせんか

古今鳥風

宗年

誰もそ毛如人小そ入る砂の

ねとそそこれあそあふれ

世帯八常の鴨に討つ

新勅撰録念

義陳

右大臣

右大臣八常の鴨に討つ

近世此山舟の鴨に討つ

一あふ鴨をそ毛記ると文也

拾遺仲文

近世

廉をけつてるといふ人まけ

鴨をそそつとあふれ

うけつらあふれやあふれ

胡蝶

波乃あや

遊ちりあまのたのみのあひの
まをたましつらぬまのた
まのまをたましつらぬまのた
まのまをたましつらぬまのた
まのまをたましつらぬまのた

死をた皆言ふまのたのたのた

奥美我抄

歌也

ぬく皆れ言ふまのたのたのた

守宮のまのたのたのた

汝乃まのたのたのたのた

世物まのた

なまのたのたのたのたのた

まのたのたのたのたのた

地普徳小 云仍

まのたのたのたのたのた

汝乃まのたのたのたのた

金葉兼昌

あまのたのたのたのたのた

いぬたのたのたのたのた

汝乃和田八十巻とてまのた

古今たのた

和田北原八十巻かきと漕出ぬ

人あまのたのたのたのた

まのたのたのたのたのた

藤古今赤人

守茂

まのたのたのたのたのた

まのたのたのたのたのた

角田川まのた

波もたのたのたのたのた

古今たのた

弘永

まのたのたのたのたのた

まのたのたのたのたのた

都

玄乃

はうらうと可きお花の都る

入る力波乃底も見る色

感義記

白感

今も知んもす川北流の

流れ底も見る色

とある

昌

塩電流うら流る色

古今集

まもはて燃ゆる塩の

うら流る色

行のふたもえ流る色

古今集

形水子教うら流る色

心もぬ人さる色

新古今集

えうらうと可きお花の都る

教うらうと可きお花の都る

馬口

流る色

新舊将

占取

持しつゝ新舊のまゝに揚言

新舊のまゝ

凡そ新舊のまゝに揚言

我れも新舊のまゝに揚言

阿事や新舊のまゝに揚言

古今貫く 未え

新舊のまゝに揚言

昔も新舊のまゝに揚言

志も新舊のまゝに揚言

新舊のまゝ

新舊のまゝ

志も新舊のまゝに揚言

牙も新舊のまゝに揚言

追も新舊のまゝに揚言

拾遺人ぬ

市も新舊のまゝに揚言

なう新舊のまゝに揚言

新舊のまゝ

時も新舊のまゝに揚言

難も新舊のまゝに揚言

新舊のまゝ

志も新舊のまゝに揚言

志も新舊のまゝに揚言

指も新舊のまゝに揚言

古今友則

如く

骨も新舊のまゝに揚言

骨も新舊のまゝに揚言

志も新舊のまゝに揚言

如く

古今諸人

言也あし我也けんねん
ゆめうりり福こりまあこり
新羅維山陰ありて鴨まはり
新古今陽魚王 深衣
芳野まのなまき此河の河淀小
鴨こりり後山陰ありて

神樂

活神まゝいんあかして
哥の酒の妻ふるりーさる

古今大舞二如法多 神系
古今あつたさ
古今あつたさ
古今あつたさ
古今あつたさ

古今あつたさ
神系

大宮此振事ろつ出立神系
古今あつたさ
神系月時由ありてけるあらの
名におあまやれさるる

後拾遺記少納言 忠由

唐とてあて名はるる言いんる
世ふ多岐の言とゆは

春日御祭

京定

なられ京我初らたう子そ

拾遺祓系

注系

銀此目費此方と出書んて

なれ此都我初らたう子そ

南都りる

正永

君奈言て誰ふくも人注系

古今友則

老らて世はるる人梅志

多しもの事も人う志

大師講

孝信

山の隈ある今日まゝる大師講

古今入信ね

信志くまらるる言

山の隈ある今日まゝる

山の隈ある今日まゝる

大師講

獲後撰て書手

山の隈ある今日まゝる

春はわらわらとあはれ

神和

宗部

昔はあり曉くけて神たき

子我道房

高砂此屋上此鐘の音は

あはれ交りて事やとらん

流

多由阿ぬをを古江此原流

古今事

月也阿ぬ喜やむりし此喜あぬ

子加多初と山いもこの方いし

大坂より

多精城交や堀江此原流

蹟千載橋在古原

堀江い玉志うまを大老此

流もきんとか子て志うせハ

加り橋毛作是長橋乃原子流

古今事

保友

罪被せし古橋此橋毛造り

いさるわたり流河小玉ん

飯詰とと流るとて

こゝろもや屏北出角歩後

丈夫寂甚

其よりあはさしのまはのえを
袖乃るまをまをけらるやと

未勤

月重る詠信北濠の歩わら
歩の上の歩をさうや

日蓮浩書

屏北出角歩

入らるる人

あまの河原下をせぬ池乃歩

古今なわら 古風

三原毛阿の原もせぬ人の志

あまなく今やあまなく

宗祇

足乃も阿のあまなく

あまなくのあまなくのあまなく

古今なわら

あまなくの人

あまなくのあまなくのあまなく

濠川北のあまなくのあまなく

初花新院

濠をまよふあまなくのあまなく

あまなくのあまなくのあまなく

銀屏北のあまなくのあまなく

朗詠

山似屏風江似鏡

町船来出月明中

あまなくのあまなくのあまなく

初花言

風をのまよふあまなくのあまなく

あまなくのあまなくのあまなく

あめを越とむる流れは花の世

後拾遺好忠

山房の流れは花の世に打て糸
玉の糸は今も今も

山百番哥合有家

山川の流れは花の世に打て

石の流れは花の世に打て

花の世に道は花の世に打て

子我後成

世中と道は花の世に打て

山花の流れは花の世に打て

花の世に道は花の世に打て

朗詠

流對の面聞を流

雪點林頭見有花

霰

流の世に

白流

枯木も花は花の世に打て

花の世に道は花の世に打て

子我時忠

たの世に道は花の世に打て

枯木も花は花の世に打て

詠巴

花の世に道は花の世に打て

花の世に道は花の世に打て

新古今文内

花の世に道は花の世に打て

花の世に道は花の世に打て

昌詠

花の世に道は花の世に打て

白玉の何回までもあるは酒

新古今の集子 言波

白玉の何となく此の何の時

昔と今を言て消えぬ物と

白玉の結ぶるはあらぬ酒

古今集性法

白玉の野にふらぬあはれん

花のちりぬら子世もあは

白玉の世より酒をぬるあはれ

古今仲丸 可成

天鳥少くまけんれをすまら

三巻の世より出づる月を

雲天

雲の世に我うそひて酒は見えぬ 珍也

金巻の集子 哉

吾れに我うそひて酒は見えぬ

白野に里人を養ふすまら

酒をあふく 占感

古の世に酒をすまらば 凡そ酒

古今集人

古の世に酒をすまらば

山にけりて酒をすまらば

集子の世に酒をすまらば 二後

新古今の集子 酒をすまらば

集子の世に酒をすまらば

我を好むは酒をすまらば

くわい雲こるすう如や雲天海

伊勢物語

百四

む月あまのこころをいそがし
えまきたまひけりきこえり
あとうりていねむらひま
皆人跡をきこふうこめられ
うとうすをきこふて尋ねり

雲

百五

白雲まをる小志らねぬ吾乃宿

拾遺書

楊柳木此より風ハ音から
てをのまらねぬ雲う海なる

宗周

おのれの木乃り風此楊柳
をのまらねぬ雲を音乃る

古今小町

一四

いよの女まらや人かんへん
まをらうや及まはらう
阿波の海にまをらう家の水面

枕刀紙

百六

人よまらうらう物家
縁よまらう人よまらう人

心なき雲とつらきし 雲なき鳥
いせ物くさり 一迷

心なき鳥をくさし ちかき鳥のめを
さす此つらき雲を我の心なる

馬乃口あきくさして雲をくさす

捨遣人ぬ 能賢

山嶽の本幅は里のさるい河を

歩よるさるいを我の心なる

弱めて袖を流雲の麻毛もる

新古今空まゆ 武珍

弱めて袖を拂ふ陰もる

佐野此わりの雲をくさす

道乃苦ハ河をい河をくさす

古今大壽の雲もる 一の体

尺木のくさくさ 河れと塔の海の

くさくさ此雲をくさす

周幅を伝人小 貞屋

ちかき雲をくさす 雲をくさす

古今新平

ちかき雲をくさす 雲をくさす

ねとくさくさ 今かろうらん

辛周

冬にさる雲をくさす 浦乃

山嶽を針をくさす 雲をくさす

三石

新古今式子内親王

山あみ春をくさす 雲をくさす

たしくさくさ 雲をくさす

世中の河をくさす 雲をくさす

古今新平人小 弘也

昔同と河をくさす 雲をくさす

昨日れくさくさ 雲をくさす

あは波くまかきらら路きく松乃

古今集風

遠近くありく家吾の白蛇

事此世のあまうらうらうの

雲北乃使とまきり風の音

ま島

花はくえ告んといひく山田の

はとまきりきりふくらとく

花とんておられぬやたのむ

古今集

春毎ふるうら川を花とんて

おられぬやの神やぬまん

宗碩

梅の香よおらるや松らん春此

宗碩

梅の香おられぬや此白の

富士乃雪や立花かこえ 弘永

四方面

富士乃山松の海のつゆの

阿のこおまてをあたこ

おまてを

山嵐門雲

山煙不絶天浮

山足三刃踏郡表治

山園面向不背玉境代原

山麓端正微妙地殿音浦

山頭四五隣宮虎子

山雪不結志田

山水流丹

燿ふもさくきふく(富士山) 燿ふ

拾遺風抄巻五

後男ヲ燿ふのふを又敷巻大下
さくきふのた夕白のむ

後古今入道前右大臣

すくまたく満乃後也此きすれ
るますすけてさる時雨を

雪に富士都を也也玉小玉

子我赤落染門

心事なつころんほしと事此
そのさくを都ありを

云後

心事なつころんほしと事此

名やると唐と毛雪此富士

子我大貳三位 成政

昔なるまろころんほしと事此

秋此寝る乃んありのり

思出残りるう此子(此きりん)

初花瀧夢 正直

思出もなつて也我方や

おん控山此身んはり也

足ふはそんさる雪此富士

新古今巻四 林麻

世才我んさくもいとさ

富士此燿也方此のめり

雪に(富士)冬もや麻子ま

新古今巻五

時さくぬいさ此子いつと

かのまもさくも此のさ

紹四

さくさく跡やまも此の乃

山よりし雪の海までいこう 京の

実語歌

富士山

山高故不果
以有樹為甚

山阿のく山並ととや不果乃

百撰抄

山外有山々不並
路中多路々云窮

江州山々

宗俊

彼浦り打出て三上富士此雷
田幾の浦小打出と富士此言殊

新古今百人

京頼

田幾のうの打出て三上は山
ふ乃乃るね小言いふり

打後身をまの込也雪解

古今百人

打わすをさう人子物まうと
我まうさう人白くまう

阿比志

銀色

梅く雪ハき方人此言々
白玉何うとんまの雪解

新古今百人

常三

白玉何うと人此何一
西のとまて消まの物と
是うけつもれ人乃言まう

古今百人

大方八月さあそく
しあまの人此言まう

降雪の枝乃甚白まきやく

新古今上 天宮 言

昔此のけきまのいさかひ
枝の葉白をあらはる乃山

室祇

白雨を枝乃を白く 冬此雪

屋根の石やまきつらよの友以

十一のま

新古今 寂然

はあまのしなまのしらしはか

我妻あいらぬつらまき

銀巴

らや雪まきあうと此さ雪

空美言

月影やまきうと此枝の雪

都と也目能くやれ疾乃雪

錦線段

雪眼羞明疾指花

らうくする家あて

ありぬ此蠟月や雪此朝

古今是則

朝顔をぬ此月とんると不

芳野此里のまきる白雪

漢語みく

雪岩阿の冬みうま

雪此京

拾遺八条のおふい若

吾名乃とる雄此山と云ちる

そんまあこの冬みうま

吾れと心草城山乃粉

貞風

古今大奇の成り

様もあつて山もあつて

まゝの時さくねもやゆるる

義作よしのちりたる人小

忍とわく久米此依良山也

はら此言

古今大奇の成り 正親

足利氏も久米此依良山也

我名もさくね義成と云

冬山此眠はまへけし乃言

李太白

体甫

冬山如眠

昌琢

冬山此眠はまへけし乃言

李太白

雪もあつて我思髪毛 彭亨

志ら此

後撰部と乃嫌

冬山此眠はまへけし乃言

冬山此眠はまへけし乃言

いふつらあり毛也 李太白

新撰撰法人心感之

古もあつてまへけし乃言

まへけし乃言

人言たぬあつても雪女

後撰部

成元

竹結る此のまへけし乃言

人言たぬあつても雪女

冬之世言

其言也春能隣乃笛能曲

後拾遺作之

いづれ又たあらくなるを言ふ也

はつたりとあつて夜中此笛行

子哉口元

笛行此曲と何小言ん

隣小言とせしよりまゝ

文選

中隣人吹笛作思旧賦

重紅粉

山田女

とてんてうのさう物也言ん

古今小町

紅粉

まゝしてうのさう物ハ世才也

人此の花子さうありたる

煤拂

歌也

歌波人やおの妻之此煤拂

拾遺人元

歌波人若夫たる屋ハすけ

をのらほりこころ

貴跡 一

年木

年木唐入言世河小重我小つ書

後撰御制歌

年木敷はまんとすまの言世の

いと小付をよらわを

とらん

餅花

年内古春

之茂

毛也花の春とまのつり年木内

古今之方

年之内小春ハまのつり年木

出るとやいそんあらし

とらん

餅花毛はらせし志すの柳花

後拾遺歌時

勢書

梅り毛我梅花花小自はせ

柳り枝小はらせしとらん

毛也花の柳り枝小はらせしとらん

玉葉入言世河小重我小つ書

毛也花の柳り枝小はらせしとらん

柳り枝小はらせしとらん

宗祇

糸楊尼多の花咲かぬ
餅花は玉ふもぬける柳花

古今通照

宗祇

浅石よりいさよりかたて白雲
玉ふもぬける春吐柳り
餅花の枯ゆ枝も楊花風之

子我時忠

たのちも花のいさよのあはれ
くまふし枝もむらさき
餅花小物もあはれ

古今は花のあはれ

宗祇

あはれいさよの老ぬ志のいさよ
花もくまふし物もむらさき

除灰

貞伸

老らぬいさよとなりけり除灰は
まんのふ道まふく男むらさき

古今果平

宗祇

楊花ちりりくまぬ老らぬ
いさよのあはれなまふく

まふく春は隣乃隣目ま

堀河院百首時

年々れは春は隣乃隣目ま
こといさよのあはれ
隣の花は花よりあはれ

後撰は花

あはれいさよのあはれ
いさよのあはれいさよ

昔もあはれはさしゆく年也

新古今諸人子 春昌

今迄小己ぬ人の世あはれり

とものほりゆくはれぬ世に

昔分と流るる年也 諸人

古今昔人子 道静

年毎ふらぬ世あはれは田川

尺子とあはれはとちりゆく

古今昔人

後浪れゆくも春也 諸人

かろあはれゆく老びゆくは

古今諸人子 一休

かろあはれゆくはぬ物とて

とてゆくはれゆく老るる

紹巴

不代を流るる年也 諸人

二四二 古今昔人子 石成

流るるあはれは袖も 諸人

古今忠孝

袂よはれゆくはれゆく

あはれゆくはれゆく

古今昔人子

年あはれはれゆくは 諸人

古今昔人子

昔ね山喜小字は 諸人

まはれゆくはれゆく

あはれゆくはれゆく

古今昔人子 道静

命あはれゆくはれゆく

何れあはれゆくはれゆく

歳言

古元

白く老れ波をよのちを乃

古今法人の歌

わらわは所しふまをる白妙の
波をよのちをよのちを乃

三葉言

咲菫花波をよのちを乃

年月をよのちをよのちを乃

古今法人の歌

よとよの物よ阿の山を
阿の山を阿の山を

古今法人の歌

何をよのちをよのちを乃
このよのちを乃

我白く老れ波をよのちを乃

古今法人の歌

波河なるたれに波たぬ日
あれともをよのちを乃

言的

田舎の浦乃波たぬ日

高のよのちを乃

詞苑成尋

老るらぬ方由は年此つら
老る人をもよのちを乃

三叶

たのよのちを乃

手はけこ又よのちを乃

新古今西歌

年ふびと又越しとて心おぼ
いめちなりけり法華此中
鼻に毛いぬる春乃隣也

古今諸人不知 言釈

出之部人ともめんよ
隣此方小鼻毛のぬる

蟬月乃流てもを交りて

古今流らむ 其友

昨日との今日とくらへて

わろてを交 月日ありけり

行年此朽くも阿ふぬ

わらふ

古今流らむ

初年此あくもあつる

つらふけり小 善ぬとてん

春

元日

致也

時と今春小あけぬと加けり松

新古今諸人しと

時と今と昔のちぬとを

を交し山を小あけぬと

松を交けり葉を也かけり松

新古今諸人しと

我道哉まもるゝをまもる

松を交けり葉を也かけり松

町と今と昔のちぬとを

拾玉意法 言釈

町と今と昔のちぬとを

物にたとへり松を交けり松

昔のちぬとを今と

史本少侍従 馬道

昔の古葉に隣りて
まことのこと乃 初筆を
命毛此長く毛々々と試筆哉

後拾遺 松安

君より物(から)ゆ(合)は
たうく毛々々と初筆を

君より也試筆の發自意乃文

拾遺の一人

おれを考く友人の文を

やそのことさうなるや

若解やいふ此貴福の福初

政也

後拾遺 日吉社

古寺

大比叡や山をえ乃拙ふ交ふ

いつまに福自ら福初もん

胡鬼子

屋戸おの毛を初試をせる初試

長恨寺

重昌

在天初作比初試

寺助

生之乃世死也此後乃後の世

初試をせるもとなりん

若葉

馬道

若の葉法也いふは初試

拾遺法也

山(か)と若(か)と若(か)と

法乃若(か)と若(か)と若(か)と

若葉と人(か)と若(か)と

後拾遺 人不知

二道

若(か)と人(か)と若(か)と

人の若(か)と若(か)と

梅

夢友

梅乃屯今袖之尾花小春

新古今通具

梅花乃袖之尾花小春

夢友

梅乃屯今袖之尾花小春

新古今通具

梅花乃袖之尾花小春

夢友

梅乃屯今袖之尾花小春

千載後頼

夢得

うわらわの人を初見北山風よ

夢友

春日条

清酒毛今日以て夢友春日山

史本後頼

直盛

二月此初申なる也夢友春日山

夢友

曲水直女

言然

曲水直女を方よりや酒乃友

端経

有眼自を方より不亦樂乎

夢

言然

野乃野小夢友春日山

古今存人

夢友

野乃野小夢友春日山

新葉

夢友

夢友

桂

桂苑拾子をんく

拾遺古今何よりあしり椿 或や

後撰敷中作

浮世の流子尋此流小拾ふ花
今を何よりあしりあまの交

花

宗隆

根より葉より花小成ふあしり人

古今序

人乃ん花可なりあしりあまの交
花阿も剛入江難波寺 深友

朗詠

遠見人家花便入

二甫

花可專読もあしり砂乃物

古今六事亦流るこ

君代代々あしりあまの交
去砂のあまの交あまの交

花乃言成障乃言も福毛く破南

朗詠

雪似鶴毛飛散乱

花はくふ嵐は屋や銀砂

洋貞

新勅撰入道あまの交

花はくふ嵐は屋の言あまの交

あまの交あまの交あまの交

横

西子存

花はくふ嵐は屋の言あまの交

古今詠人

あまの交あまの交あまの交

あまの交あまの交あまの交

花はくふ嵐は屋の言あまの交

玉葉西行

西子存

花はくふ嵐は屋の言あまの交

あまの交あまの交あまの交

日野山や老く健ふ見極る道

方丈記

以下日野山の奥小跡をくぐりて
 中畧かゝる山喜山阿方時と來
 ねるや好ましくは終るる能は
 こまを友とくしあるもあつく
 う終る十三年我を昔まら
 毛乾る此かを道とすくも我
 ちかすの事いしは道はた
 あるは流花我ぬまはるを
 とる又ぬまをまら其は流花
 楊重妃乃花小の道は乱る
 まり流る
 加る事此おありぬまを世毛
 乱 中畧 やまは此たす毛
 乱るは流るるまらゆふ

本乃道の二毛路やの家稿

帯本

本乃道の二毛路の物をもふ
 まる毛を流るるは中畧
 又路は以上子あやまると書
 出ふ毛を流るるは流るるに更
 ふおらわまるけらあやま
 刃しわら

藤

流るる山踏ふ

折る子かせ踏ふるるは流ら
 金葉藤人不知 辰

三熊母の詔の亂つてきつら
 老るるまらるるるるれ

茶稿

天周

春く事い河をれ昔と茶流るる

新古今種大改大旨

道乃ハ花枝中の都喜くらハ
阿毛草アモクサと志のそれそ
燕ツバメ

子乃コノと花梅と菓小や唱燕

初花ハツハナ花山院 政也

本の中と花梅とすれを世の
屯る人ふあふぬアハルヒト

維イ 二南

地震チクゾゆらユラとト色イロわらぬ

伊藤物イテモノ ちんくせ

梅のほろと枝小維イ付て
うほ川家とて

そめたのむソメタノムとるあトと打ウ花
時トキ一毛ヒゲぬ物ヌモノあアらラる

横綱ヨコヅナ 真正

花乃ハナノいろイロとト川カハるルやヤ屋ヤきキ 横綱

古今コノイマ小町

花のハナノいろイロとト川カハるルをヲ洗シふ
わらワラとト世ヨ小コ家カあアらラるルあアらラるル

夏

牡丹

花壇ハナダもモ三ミとト心ココロとト隣ナリ草



小学

夙喪ソクサウ又マタ幼被コトシ慈母ニ三邊ミヘ之ノ
印イ花ハ 教

かカ花ハやヤ風フウのノ子コあアらラるルあアらラるル
拾遺シツイ流リウらラぬヌ

祢ネまマのノ室シヨウのノ印イ花ハ白シロあアらラるル
みミとトくクあアらラるルあアらラるル

雪此之我及盗人ヤ花卯木

之花後頼

之信

雪乃乃多我盗てはまろふ花

はらそと人ふらそとるらん

棘花

之昌

花あらし手房やまろ我はら

後撰遍照

おはまらたふらふらるるたて

三世此併ふらふらそまらる

百合

弘永

九十の夜うよひて毛足ん身百合

千載後成

おまらふらと櫻のそと繁くま

百病毛月一花秘まんとつめ

厚緋

之信

是七月尔来は八尺の厚緋

石竹

重延

花いさかおまらぬや沖乃石乃竹

千載は如也

我袖と塩干ふらぬ沖乃

人そとまらぬかそと乃ら

桑

祇事ふまらりたる人小

次の自給といふる我 重貞

今日来及の明日とまらぬ此後真

古今事年

と白出及の明日を雪とらふり

消まらぬわらむとらまらぬ

郭公

わらふまらぬ疾阿のたら 貞盛

新古今家隆

いんもんはぬ疾ぬ多此郭の

まろしとんを即ち雨乃を

結小阿の涙子流るをさき

新古今後成 正南

昔も子事此いなり此疾の雨

涙子そへう山やと

なまやうとふ山やをさう

子祝

足地乃く此おの涙あるうとふ

子事や此うとふさそ

敷

引ひく人抱かやと敷帳草

之政

新勅撰了集年

松とそ引引子事毛を

世重

近赤殿信平公宇治ゆ

軍武法流院王うる時小

紙媚めさや解乃世小巻

春可

山事三山小志そく

王居る扇法流院王結小

蟬

徳元

玉まぬ城もそやさしく蟬の母

蓬塩草

玉まぬ此はのく志山此家此妹小

物いさよまそ松毛のうぬは毛

是やけ蟬丸ぬ事此かすうら毛

後撰蟬丸

宗正

山籠りけ新毛かすうら毛

知毛志うぬま あはる乃冥

帷子

藍刃ての後乃れ粉法や格投過

拾遺教忠

急刃ての後乃れふささくささく
きうくハ物我心をはりしり

植田

元辰

はらうふれ阿ふ田全此田うハ哉

古今小町

絶ぬ事ふり成浮草此根を流

はらうふれ阿ふハあんとく

此

深衣

心出也や事と義法
まふハ

新古今伝抄

心出也やんれハ古山ハ一書

ちまきりハ事と心出也
心出也

蓮

古風

風時々心毛初程也蓮此ハハ

全系系承縁

まきくハハ小珠ハ今ハハ鄭云

心毛初程此ハハ心出也

看と心池ふハハ心出也

後拾遺舞系
女流 珍也

紫小やハハ心出也

後撰諸人不知

蓮此ハハ心出也

古山ハハ心出也

法系

心出也ハハ心出也

後撰諸人不知

古風

右此野中此清丸乃るくは
此の物に清なりなり
一巻酒

我小事機也又之聖一巻酒

山家集

清くたう也又汲人毛あり

我小事是山乃井也

扇

阿らけり一君ら自心也毛を扇

捨違才勢以具平親日

阿らけり一君ら自心此高札に

梅の花をさうけさる折る

方丈記

平急道

今一月をさうて二乃用我をさ
や川之是此集物とく我ふ小川

暑友

之信

白玉此乃るく毛ちるう袖乃汗

古今たわもら

ぬさ乱る人こころまら一白玉

乃るく毛ちるう袖の毛をさ小

は舞人真行

安流度此乃るく阿里也友度友

古今清人

此清乃塩樓花おさあ

乃るくあまやさるうまはぬ

さうあはれはくもよやま喜喜散

常々

月あつたあまうお毛さく堪道

てあくぬちれはくもさく

いとくはあまあまうお毛さく

納涼

一正

唐風や船哉うかぶるの程に

新古今家持

唐人の二再哉うかぶるあふふ

と日る我きと花うらさよ

御縁

江若らり境ふりかりて

南水も西北阿そまらるる哉

續古今並直

重正

舟の波やあそまらるる此塩ち

阿そまれば出〜江若乃神

秋

灯籠

夕小そや秋の月より灯籠

新古今はるん

夕小そや秋の月より灯籠の

袖より山らぬ影〜夕小そ

躍

之信

月夜〜夕小そや秋の月より

古今詩人不知

在るや

月夜〜夕小そや秋の月より

夕小そや秋の月より

相撲

夕と力いそやあらるる大相撲

古今詩人不知

重昌

我をのそやあらるる大相撲

夕と力いそやあらるる大相撲

夕と力いそやあらるる大相撲

後拾遺詩少歌云直来

夕と力いそやあらるる大相撲

夕と力いそやあらるる大相撲

岑入

之信

吹くは秋の岑入や洞乃貝

古今や信云

吹くは秋の昔年此言あるを

むつ山風哉嵐と山中人

月

文月此言也苑と地らく虫

古今施

弘永

秋の重と月此桂乃言也なる

光哉苑と云く信を云わそ

又月や阿言の言は信光信

新古今意四

伊伯

あ言の言と回人此言なるん

あ言の言小月は言也

月結之會小盲人

あ言の言云

三尾線の弱小信とお月結

後撰後人不知

重長

夕言の言道是言と信と古今

至と云の言小信と云く

友と云の言合月哉云く

月あり(言小信) 廣政

宵燭共情深夜月

新古今意四

忘哉の言は此言人言

乱乃言此言けの玉垣

はら月や言小言は言 重田

拾遺五言

風子言

横交本乃下風を言云く

言の言言は言言云く

新千載守元

郭公卯花山小結らひく

重小志ら重女月小鳴也

清真也本小結志之 貞成 月乃真

新古今抄改古改天下

雲六皆自をらひをこる 秋風を

松小結し之月と名る哉

鳥爪

松中らるゆりか子也鳥爪

冷泉院乃這時白髪又鳥爪

あうらる我人小毛名世伝を

給を作りかきえ

金糸糸少羽肉結

ちこもく世小面白き事

ゆりか子と誰うとらん

蘭

貞成

き方小白くきけるハ何や蘭

古今語人しと教

打つ原を尋人小物まうは

我まうらに白くきける

萩

何の毛

萩元と乞山下と山酒宴外

古今語人小毛 実且

秋萩小うらむ事せまハ

山下とよと麻のあくらん

姫萩れ白く小浦と子男麻也

流馬く 之信

久米の仙人此物あら子

女乃るまき此白髪とらんて

通我失けん也

子我基後

文城のくちかや男之形此處
花咲くよき世のよき

朝

おろそひ起ておまけ 政や

古今の世い うらやま

あてそひ起てうらやまの

祓うけく我言のる

菓

高唐

阿房ゆし袖のりかや此

古今の地のく

阿房ゆし袖乃才も入の気

我たまのめはあやんちす

うまといまきるまは砂糖栢

拾遺人まら 貞徳

梅屯るまきるを久々の

天方五のあてふまてハ

布引り

室

水栗をけけ天口此

浮世物語

五石の上のまきう海

小梅子栗此大まは

山屋まお川

未勤

漕つ波本のまをく

栗毛をるまを此白玉

菊

政や

あまの橋毛多我ふ

古今の法入

地りぬたまをく

まき支時れ

紅葉

春可

紅葉をく見かん

朗詠

林間暖酒焼紅葉

紅葉鮒

直唐

まきまき鮒わらわらまきまき

新詠哉

後撰是則

今まきまき鮒てまきまきまきまきまき

わらわらまきまきまきまきまきまき

冬

初冬

元辰

まきまきまきまきまきまきまきまき

新古今和歌

年ふけて又越へしとまきまき

命ありまきまきまきまきまきまき

乃めえまきまきまきまきまきまき

拾遺能宣

まきまきのんまきまきまきまきまき

日まきまきまきまきまきまきまき

まきまきてまきまきまきまきまき

朗詠

直貞

氣霜風抗新柳餐

よまきまきまきまきまきまきまき

第本

直昌

よまきまきまきまきまきまきまき

よまきまきまきまきまきまきまき

ゆまきまきまき

時雨

近者

時あてまきまきまきまきまきまき

古今能宣

直三

秋まきまきまきまきまきまきまき

まきまきのまきまきまきまきまき

雲

輕敷

落丹化そと玉粒成踏ひあふ

朗詠

朝踏落花池おほ出

帰花

一とせ小二葉まてころおひは花

後拾遺益感

一とせ六二夜もあぬ春ふれ

いそぐくちふら花もこころ

水葉

追善

忍道

新志毛阿連文ふら葉毛中出

新古今葉文

時一毛阿連文ふら葉守此

満ちらひたふぬ 杜のかたむ

雲

言出

小瓶忍と中毛阿連

古今とゆ

それのさあやゆらこ

磯乃浪ふ沖み出たり

日吉まみ

冥加阿らせ玉あられてふ祓の

新古今

あのかたからさきやくさるるの

玉葉私小冥加 併葉

碎乃豆やちき舞へても 好尼

五葉舞

物心ふしちき舞へくふあふぬ方
袖亦ありくふきふあや

雪

月雪の友哉尋る数奇

寺部

山陰や友を尋る海ありて

鳥のふくむ此雪の春は月

寺部

山けや花の雪ちる阿けの

牛のふくむ月小誰を尋ん

山陰

月雪の友哉尋る都哉

言員

笠乃雪と手より此道毛

言員

可士

笠重雪の天雪

鞋香楚地苑

山殿書

体南

餅苑と年まら哉をぬる物

後撰さうの若

多事此年まらきる歌

力の教ちぬ物少るまら

後撰輝大改大臣

と道小をらふ此乃はくは

四丁とせ阿のり年まらり

月雪をめんはむら 道秀

年忘

古今集平

大くは月をめんはくは

はくは月をめんはくは

未高

法をわたり老とたる世に
雪はうへを流月鏡に
影敷小あらぬ身毛と成

後撰詠人不知 其

影敷小阿らぬ身毛と成

山あり毛よしく成 なる果るん

昔少けり時ふ山事申此也

古今序

政也

たふふ時ふ山事申此也
多のく尺かあしくゆふふ
とふけ哥此文字あふふ

白敷之事

吾名氏四百三十

京之住

救海 一 永也 四

素也 三 忍道 五

林 一 昌意 三十一

貞徳 廿四 春可 十六

正直 十八 氏直 九

重方 四十三 直佐 十一

重貞 十四 直好 十二

長好 十一 宗隆 十三

重昌 廿二 直長 廿一

直頼 三 直頼 六十九

意敬 三 朝雲 四

重和 一 知徳 一

永治 一 宗意 四

二道十五

恒悅四

意後三

元辰三

正良三

崇信三

玄伯一

英武一

宜務一

政昌一

尚直一

正秀一

正長一

貞之一

不見五

廣寧四

友雪二

之家二

之周二

安寧二

三省一

正信一

正正一

正依一

政直一

政時一

正業一

忠章一

直章一

威成一

道秀一

佳貞一

賴一

良三

康之一

紅口廿四

宗繼五

宗野一

言也一

一正一

真之一

威之一

廿八

廿八

宗直一

象利一

乾富一

師政一

父子二

道益三

道益三

道益三

道益三

道益三

道益三

道益三

道益三

道益三

道益三

道崇 一

方好 二

成安 七

祐巴 四

弘承 三十

貞威 廿八

長治 三十

昭成 十九

一守 十三

三征 九

松安 廿三

正南 十

芳心 又

成政 十二

貞伸 十二

貞威 七

以急 五

一急 四

正村 又

成之 六

賴廣 二

勝明 三

嘉雅 三

成元 六

安成 二

勝安 二

永政 二

才由 二

利廣 一

長正 二

宣之 一

治之 一

正範 一

吉章 一

廣友 一

德順 一

長成 一

松安 二

岸和田

風子 二

長雄 一

元經 又

定經 一

宗成 二

中好 一

吉如 一

廣政 一

淳言 一

賴敷 一

直威 一

正芳 一

式周 一

長政 一

正冬 三

河内松島之江

之信 十

大坂之江

体南 廿二

吉忠 十

一	一	二	二	三	三	四	七	五	十一	十一	十一	十三	三十三	二十四	二十
直宅	秋好	茂陈	助音	宜吉	自慈	意翔	未元	是等	乾賢	正後	後純	春備	保友	宗立	一
友次	三政	忠由	智德	文翁	正永	宜安	好道	宜長	後真	近若	宗信	茂昌	蒼信	嘉嘉	秋女
一	一	四	二	二	三	三	六	五	五	七	十一	十四	十八	十	百五

平野之經

一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
久經	友行	親春	安利	良京	由貞	正安	冬貞	正長	悅春	厚成	宜庸	宜定	宜命	一	一
利貞	玄康	貞周	如春	秋月	茂昌	珠軌	直正	昌次	乾賢	宗嘉	宜之	勝政	一	二	二
一	一	三	一	一	一	一	一	一	二	十二	九	一	一	一	一

律貞二 之政二

山田之經 一

伊勢松坂之經

友友 一 加友 六

直秀 一 吉兒 一

山田之經

守氏 四 武珠 二

武清 一 延高 八

不棄 一 滿友 一

常好 一 近周 一

宗茂 一 貞親 一

文性 四 貞一 七

孝晴 一 光三 三

元茂 三 有延 一

長善 一 吉政 二

如之 三 山田 十二

尾張名古屋

可交 一

江戶之經

德元 五十三 玄札 七

未得 七 定時 六

令巾 十六 宣安 七

林麻 五 式是 二

速志 三 但秀 二

得松子 四 康本 二

自矣 一 泰次 二

淳等 一 意伴 一

京榮 一 好水 一

正之 二 吉成 一

大江 近江

宗連一

坂本

宗彦一

夏流竹ノ鼻

可政一

一意一

聖哉一

陸奥

岩城之住一

敦賀

越前

草村

吉仲四

日能一

金澤

加賀

少室

正一 二

可理三

少室

可信一

日

菅沼 一

丹波柏原之住

信勝一

因幡多取

康庸一

信英七

云英四

雖云二

出雲松江

長知一

播磨

利右一

龍野

直久一

高砂之住

寛政二

茂下 一

備前豊山

後安二

時明 一

清瀨一

白親 一

序上之住

吉与二

備中

信元三

長門秋

重山一

那智 道護 二

真以 十三 正春 四

肥前佐賀

正守 一 意實 一
如自 一 如曼 一

長崎之経

言茂 一

肥後熊本

一明 一 宣賢 一

親宣 四 宣純 一

純五 一 棘口 一

可保 儿

右戴子二句

作者二百九十二人

追加春

鏡餅相まて白支や祓乃春 長弘

古経拾遺

當此之時上天初時流俱
相見面皆明白伸手歌舞
相與稱曰阿波礼阿那於
茂志呂

祓代より今日此乃春乃春の事

新古今集光

祓代より今乃春の事
長田の搦れ志多の事
心乃春や立葉ゆの事
祓乃春

古今大系 宜利

春やさかきけと梅の影を
立たしゆりし春のまの影を

一本のち三寸梅の影乃松

後拾遺集

武隈の本より三寸梅の影乃松

いとと梅の影乃松の影乃松

今日といふ梅の影乃松の影乃松

新古今後成

今日といふ梅の影乃松の影乃松

梅の影乃松の影乃松の影乃松

梅の影乃松

雪乃中ふきふきふきふきふき

三休結

行尽江菊數十程

時を今春山乃梅の影乃松

新古今法人不和 京由

時を今春山乃梅の影乃松

梅の影乃松の影乃松の影乃松

梅乃内小春と梅乃内小春

古今二條台

清安

雪乃中ふきふきふきふきふき

梅の影乃松の影乃松の影乃松

春やさかきけと梅の影を

古今二條台

永宣

春やさかきけと梅の影を

梅の影乃松の影乃松の影乃松

鼻小梅の影乃松の影乃松

新古今法人不和

花小梅の影乃松の影乃松

梅乃中ふきふきふきふきふき

梅乃中ふきふきふきふきふき

新古今通具

西村

梅乃花たちう袖をぬく白きと
まはさしうし月あつらふ
さう子さ大さもくらんを梅

新古今集

さう子さ大さもくらんを梅
三絶の強きなるあらん
昔のやちをを雪はふるも

新古今集

昔のやちをを雪はふるも
雪はふるも雪はふるも
春のあつらふあつらふの心

春日野小我もあつらふ二月雪

古今集

春日野小我もあつらふ二月雪
春のあつらふあつらふの心
春のあつらふあつらふの心

春日野小我もあつらふ二月雪
春のあつらふあつらふの心
春のあつらふあつらふの心

二月の初申を申す事

古今集

二月の初申を申す事
春のあつらふあつらふの心
春のあつらふあつらふの心

春のあつらふあつらふの心
春のあつらふあつらふの心
春のあつらふあつらふの心

古今集

春のあつらふあつらふの心
春のあつらふあつらふの心
春のあつらふあつらふの心

春のあつらふあつらふの心
春のあつらふあつらふの心
春のあつらふあつらふの心

春のあつらふあつらふの心
春のあつらふあつらふの心
春のあつらふあつらふの心

春のあつらふあつらふの心
春のあつらふあつらふの心
春のあつらふあつらふの心

古今集

春のあつらふあつらふの心
春のあつらふあつらふの心
春のあつらふあつらふの心

春のあつらふあつらふの心
春のあつらふあつらふの心
春のあつらふあつらふの心

春のあつらふあつらふの心
春のあつらふあつらふの心
春のあつらふあつらふの心

古今集

志のあはれ思ひの如きはるも
人乃あはれれおんもるも
此とんておらんとすれは目醒

古今伊勢 言利

春こそふるも川をたんとて
おらまぬあふ袖やぬまらん
なふ心とて花ゆきとく道の橋

新古今西行 安政

あふ心とて花ゆきとく道の橋
ちよとくあふ心とて花ゆきとく
橋をたふと推しとて花ゆきとく

新古今西行 安政

えとくあふ心とて花ゆきとく
あふ心とて花ゆきとく道の橋

砂酒や春宵一石花は夜
東坡 長弘

春宵一刻價千金

花有清香月有陰

花見のあはれ 立頼

あはれあはれあはれあはれあはれ

新古今成範

道のあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれ

五車白瑞藩閩

高愛三峯挿大虚

回頭仰望倒騎野

短冊のあはれあはれあはれあはれ

伊勢物語 泰次

あはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれ

新古今西行 近若

押並く花の盛ふ成ゆふ

山の塩ふふくさるる

らんきくれ雲の影は花乃風

新古今言良平

夏花の影うらみ此冬乃雪

そ哉ふみ影をまきの山風

花乃ふふかりて 三記

桜花はうは先ん酒のかん

新古今隆時

桜花さうえ先んとさすまに

日数屋ふきり春此山風

流き小老哉阿そぬ姥櫻

全古今言

流き小老哉阿そぬ姥櫻

花よりわぬはか人毛の

継本此塩ふ成

塩ふふのり継きん山風

隆時捨違事平 狂言

塩ふふのり継きん山風

物と海舟も言ふ山風

松小藤かほ折山風たか

成元

いせ物さか

いせ物さか

継鐘のり継きん山風

新古今忠山 宣徳

夏果の扇と秋乃白雪

山風

大津山風

流人や新哉阿そぬ姥櫻

新古今言

徳人の福を我々の徳の強風
に帰す事なきは善なり

石亀やうらや海へも海原松家

古くはまゝにまゝにまゝにまゝに

魚乃相や花も成る様銅

子我良経 一四

様ちる比良此の風鳴ま

花もあがりゆく善なり此の波

誠なる事なく

いふことなん今日いふ事なきは

古今徳人不知 様銅

甚目野ハ目ハ目ハ目ハ目ハ目ハ

法ももももももももももももも

朝もまゝに法もまゝに様もまゝに

陸奥拾遺集

増すゆめいりまゝにらん朝もま

約するもももももももももももも

閏二月小 厚成

新春乃能其日出及家居也

周易

積善之家必有余慶

夏 長好

友らるる不都乃南奈るははら

新古今拾遺殿

春日山都北南志るまゝに

水の流るるまゝにまゝに

唐布やちのくまある及花

古今集 方由

かゝる花をいふはあしき事
たのしみもあはれもなき事

郭ら其の病敷多しあはれ

新古今もあはれ 三記

いふもあはれこゝろあはれこの時

あはれこゝろあはれこゝろあはれ

我んいふもあはれこゝろあはれ

新古今後成 永重

あはれこゝろあはれこゝろあはれ

あはれこゝろあはれこゝろあはれ

あはれこゝろあはれこゝろあはれ

新古今諸人不知 月

あはれこゝろあはれこゝろあはれ

あはれこゝろあはれこゝろあはれ

あはれこゝろあはれこゝろあはれ

あはれこゝろあはれこゝろあはれ

新古今西行

あはれこゝろあはれこゝろあはれ

山田のそらに花乃村立

声あはれと人あはれと時

古今管王 泰次

和田の原八十崎うけてあはれ

人あはれとあはれとあはれ

あはれこゝろあはれこゝろあはれ

拾遺集の女流 方由

あはれこゝろあはれこゝろあはれ

あはれこゝろあはれこゝろあはれ

あはれこゝろあはれこゝろあはれ

古今管王 三記

あはれこゝろあはれこゝろあはれ

あはれこゝろあはれこゝろあはれ

瀬をよと細ふせくや良三

初花新院 鮎の魚

瀬をよと岩の中をくく瀬川

わきまのまのあつんとさふ

なまぬやとんまかそら鮎の鮎

古今諸人子也 鮎

あつぬやとんまかそらさき物

なまぬやとんまかそらさき物

糎まてて

ふらみとわつらそらほま毛糎

新古今太上天皇

ふらんとらあつぬやとんまか

ふらんとらあつぬやとんまか

三月一日 正後

今日いそへぬまかそら一海解

荀子

流水るる而垂る龍水也

紅小自白地乃あま文武留女

いせ物より

紅小自白より白地白文より

おらんとらあつぬやとんまか

まかそらあつぬやとんまか

新古今後成 方由

仙人の打袖白小葉乃あま

あつぬやとんまかそらさき物

あつぬやとんまかそらさき物

古今諸人子也 甚好

次三北筆の権様をたきて

あつぬやとんまかそらさき物

流るるて 一解

竹ちくちくあま庭涼く下りて

後撰伊勢

行をくば座をいさしきし
鳴るまけしをいさしきし

燦

元經

秋をぬと目小はやとなり揚灯籠

古今敏行

秋きぬと目小はやふみぬ

風の音もよるおとろけぬる

燦 一のりるるふ初瀬風

子載俊頼

長治

うかろる人秋初めの山下風を

をきしうきといのらぬ物を

東秋我手小雲をさ知白丸

朗詠

知徳

下々ふふふ秋をりあはし

弦の泉はふはし涼

我らと音我ころちあ秋乃聲

古今直子

重方

海にける塵小経車のおきくらと

者さころなるあ世我をくらん

七夕後朝小

正業

別路も糸小する物や七夕

古今若く

糸のよる物さくらにふ路の

んをさく毛ねもはゆらふ

玉ありりそあし知へ

春次
絶絳鬼朔

桐壺

尋ねまらうとも徳小に

玉のありう我さごとく

刀裁毛いさしき徳や曲お撲

古今序

常吉

力裁毛いさしき天地をうら

名を以て邦をたふさるるを花撰

新古今天智 三言 方田

朝倉や本丸殿小よりとせむらん

名を以て邦をたふさるるを花撰

花山より花撰一日二日酔好道

朗詠

槿花一日自為棠

詠宿ありて

草花ゆき屋にとやををるる

新古今天智

草花ゆき屋にとやををるる

唱へて告よ秋かたし秋声

秋の花は袖小かきし摺捨歌

新古今天智 正範

秋の虫は袖小くけて言ふ此

尾上此の虫よ玉子より花たれ

秋乃夕朝紫乃花は能多利

新古今天智補

為夢乃花乃花は朝志あり

秋乃夕朝紫乃花は能多利

月乎此の月しんを多の能多利

古今天智人不知 三弘

月乎此の月しんを多の能多利

月乎此の月しんを多の能多利

三人の中能多利 威安

心乎此の能多利を多の能多利

新古今天智

野の心は能多利を多の能多利

心乎此の能多利を多の能多利

余の心は能多利を多の能多利

古今天智

新古今天智人不知 正範

余乃よのこもるや屋をん
高間乃のの光乎此まらるや
昔も少を志らるるんもたをこ

新古今定家

むせめを志らるるんかをらや
我乃まけさぬ下此まらるや

以朔小

泰次

君ら門ふもるたの毛此礼者哉

續後拾遺集

我方ふよると唱なるこまを此

たのむ此厚哉の月を心

又毛来ん秋をたの毛此礼者哉

新古今拾遺集

又毛出ん秋哉たのむ此厚たふ
鳴るるかつる春此照屋の

普天の下その川と此の地や三々此月

毛詩

維新記

溥天下莫非王土

率土濱莫弗王臣

月や照らんを海も此川

古今集

定陸子

月や照らぬ春や昔此喜ならぬ

毛詩

月の嵐あまを屋はらまをや哉

新後撰集

定長

秋風小不波乃屋のあれま

物からぬ此月をまらるや

月や照らんとすれをかつこ

古今集

そふもそふれをかつこ
あまの空をまらるや

と人老弱のまじりては月の子

古今集人子知 信友

と人老弱のまじりては月の子

古今集人子知 信友

下戸此心ちけりぬ月の子

古今集人子知 三福

我心ちけりぬ月の子

古今集人子知 三福

今夜たはしき月乃乃

新古今頼政

とよみしは月乃乃

古今集人子知 三福

枝大さき月乃乃

古今集人子知 三福

甲斐より報はりぬ月の子

古今集人子知 三福

弟小短冊付る紙

天津風をたれし白花

古今集貞 三福

天津風をの通り吹とる

し女此波女志とる

白菊や吹とる砂の物

古今集貞 三福

秋風の吹とる白花

花うけぬる浪のまじり

菊花や吹とる砂の物

古今集貞 三福

我宿此菊の白菊は白菊

いそ世はまじりて濁とる

今日とのを詠白も菊のまじり

新古今集 三福

とよみしは月乃乃

都小北と相思のなるは

わきしよ小北をよまなるは

甘稲

古今美人

我よのよのよなるは月

よわなるよのよのよなるは

清くかよひしよよは清く

砂糖

古今美人

よまんとよまのよのよなるは

よよよよよよよよよよよ

山川小北とんんかよひなるは

古今美人

山風小風の吹くよのよなるは

あられをよまぬよのよなるは

都ては苗代なりし秋田米

後拾遺能因

直観

都をよと霞とをよのよなるは

秋風の吹く白川乃実

銚子のよのよ越路のよのよなるは

古今美人

君我のよのよよよよよよ

よのよのよのよのよのよなるは

冬

都を月風よのよのよなるは

古今美人

都を月風よのよのよなるは

よのよのよのよのよのよなるは

古今美人

君よのよのよのよのよなるは

君よのよのよのよのよなるは

よのよのよのよのよなるは

秋時雨のあまのこゝろ

新古今西行

月夜結る程のそよひ時ゆわわ
るあまのこゝろ秋時雨

神前法要

時雨のあまのこゝろ丹塗

新古今能因

時雨のあまのこゝろ山嶺
のそよひ時ゆわわ

燈のそよひ時ゆわわ
風雅順徳院

せう

ちの雨川春新ゆわわ

清きつくりのそよひ

大流ゆわわ

每人毛鰯

玉菖

每人毛誰哉

うらうら

浦近くあまのこゝろ

古今魚の風

陽ちこあつくるあまのこゝろ

まの松ゆわわ

あまのこゝろあまのこゝろ

古今雲をたけ

あまのこゝろあまのこゝろ

あまのこゝろあまのこゝろ

昨日あまのこゝろ

新古今家隆

昨日あまのこゝろ

は田あまのこゝろ

友人たれ小回道



其世ふら門出せわ世名くふ
なとら我方たつてくふ
か多あひもまててあまけ 同

行ふとるる難とあはれと

山内古春小 元銀

年の内小春北急野あらん

古今之方

年の内小春の身小くつを
まてあひもんあつて

年北終ふりたる

白小よ流志を及毛嫌

拾遺重く

行はるる年の年とあはれ

春秋を阿ととわを嫌

吾名氏廿二

東之住

重方 四

重徳 二

宗隆 一

長好 二

知徳 一

重頼 三

頼富 四

重長 一

良三 一

西久 一

正業 一

一辨 一

伏見之住

任口 一

安政 一

境之住

友友 一

成安 一

李安 一

芳心 二

徳安 六

三海 六

長弘 三

忠之 一

